

「シンセシオロジー」創刊記念シンポジウム

個の「知」から全の「知」へ ― そのシナリオの共有と蓄積について

2008年5月13日、秋葉原コンベンションホール（東京都千代田区）において、「シンセシオロジー―構成学」創刊記念シンポジウム“個の「知」から全の「知」へ―そのシナリオの共有と蓄積について”が開催され、産業界を中心に330名を超える方々にご参加いただきました。シンポジウムでは、小野 晃 シンセシオロジー編集委員長の挨拶の後、野間口 有 三菱電機株式会社取締役会長から「基礎研究、その今日的意義」と題し、また中島 秀之 公立はこだて未来大学学長から「構成的方法論と学問体系」と題してご講演いただきました。引き続き、経済ジャーナリスト柏木 慶永氏をモデレーターに、広瀬 研吉 科学技術振興機構理事、木村 英紀 横断型基幹科学技術研究団体連合会長、上田 完次 東京大学教授、前田 拓巳 株式会社島津製作所技術推進部長、持丸 正明 産総研デジタルヒューマン研究センター副研究センター長、赤松 幹之 シンセシオロジー編集委員会編集幹事をパネリストに、「技術の統合と共有の方法論について」をテーマとしたパネルディスカッションが行われました。最後に、吉川 弘之 産総研理事長が総括・閉会挨拶をしました。当日の各挨拶、ご発言、コメント等の要約（本誌編集委員会作成）を以下に記します。

シンセシオロジー編集委員会

小野 晃 シンセシオロジー編集委員会委員長【開会挨拶】

イノベーションの推進には、基礎研究の成果をどのように効果的に社会あるいは産業に結びつけていくかが重要です。私たちは、研究における最初の発見や発明のところを第1種基礎研究と名付け、そこから現実の製品に至る過程での異なる領域にまたがる構成的・統合的研究を第2種基礎研究とすることを提唱しています。第2種基礎研究の部分は、研究にとっては非常に困難な時期であり、「悪夢の時代」とか「死の谷」とも呼ばれます。そこに技術的な観点から、あるいは研究者側から積極的に取り組むことが大事ですし、悪夢の時代をいかに乗り越えるかというところに研究開発型独立行政法人の大きなミッションがあります。基礎研究の大きな担い手である大学、製品化への担い手である企業との連携の必要性も同時に認識しています。

このような背景のもとに、第2種基礎研究をより深く掘り下げ、それを社会や産業界の方にもご理解いただこうと、雑誌「シンセシオロジー」を創刊しました。現在の科学技術は細分化された分野ごとに学術誌が刊行されています。しかし、現実の製品とか、社会に出て行く技術は、多様な分野の技術を統合していかざるを得ません。多様なディシプリンを統合する研究者には細分化された学術誌では不十分ですし、また、先端的なアカデミアの雑誌は産業界とか社会の人々が読めるような形になっていないという問題



意識もあります。「シンセシオロジー」では、科学技術の全分野を対象に、第2種基礎研究のプロセスと成果を記述します。読者としてはいわゆるアカデミアの研究者だけでなく、産業界、社会の研究者、技術者の方々を想定しています。

論文の記述上のポイントが幾つかあります。まず、研究目標の設定では社会的な意義や価値を科学技術の言葉で書くということで、従来のイントロダクションをより精緻にしたものになります。次が最も大事な点で、研究目標を達成するためのシナリオを書くこと、つまりどういう要素技術を組み合わせたり開発したりしながらいくのかという、研究者としての夢の達成の道筋を研究者自らが開示していこうということです。要素技術選択の理由や、組み合わせにおける問題なども記します。著者と査読者との議論を載せている点については、大変面白いという反応をいただいています。第2種基礎研究をどのように論文として記述するか、査読者と著者との議論の公開を通じて進化させていきたいと思えます。



シンポジウム会場

野間口 有 三菱電機株式会社取締役会長【招待講演：基礎研究、その今日的意義】

およそ20年前、欧米にキャッチアップするまで、日本は技術導入期でした。基礎研究および技術的に立証されたものを導入する形で、投資効率は高く、品質と生産性で強い経済力をつけました。その後、バブル経済の終焉を経て、先導型のR & Dに移行したと言えます。ただ企業がすべて自前のR & Dをやるわけではなく、産学官連携などを広くやろうという時代です。新しい技術も市場形成も自ら生み出さなければなりません。社会における法整備なども絡め、大変な努力を必要とする点で、先導型R & Dはキャッチアップ型R & Dと大きな違いがあります。



先導型R & Dを進めるには基礎研究は重要ですが、市場経済の中で民間企業ではどうしても製品化研究の比重が大きく、「死の谷」の存在は投資効率の障害になります。そこで三菱電機は今やオープンイノベーションの体制をとっています。1つは産学官連携で、内外のアカデミアの基礎研究成果を活用しようという取り組み。もう1つは他の企業との連携も行っていこうということです。また、事業、知財、R & Dの三位一体経営を指向しています。事業戦略を立てるとき、製品や販売といった点だけではなく、その事業を支えるR & D能力の位置づけを行い、これまで蓄積してきた知財をどれだけ活用できるかを経営レベルでも把握します。核となる技術と知財を重視して事業をやっていくということです。三菱電機では5つのセグメントがあり、その中で技術的なシナジーを活かした強い電機・電子事業の複合体をうたっています。もちろん経営は技術的なものだけではありませんから、全社の知財を共有・活用し、21世紀の社会動向、技術ロードマップなどを考えながら、今後の50年100年を目指しています。

歴史の長い企業ではどうしても組織間に壁ができ、1つの知が全体の知になりません。それをコーポレート（開発本部など）のところで見渡すようにして全体の知にする仕組みとしています。そうすると、R & Dが引っ張る事業が生まれることもあれば、知財の分析から事業戦略の提案がなされることもあります。R & Dには新製品や新技術の創出のほかに、生産性の向上、論文発表や標準化という期待もあります。特に国際標準は大事で、それを成果として提案できるよう、産学官連携で取り組みたいと思います。環境対策や品質改善活動でも横の連携をとって進めています。先導型R & Dの時代では成果もまた多様で、単に目

に見える有用物だけではなく、世界の人から尊敬される日本生まれの知的財産やルール、そういうものがあるから安心してそれを使えると言ってくれるような成果を出すことも大変重要ではないかと思えます。

中島 秀之 公立ほこだて未来大学学長【招待講演：構成的方法論と学問体系】

構成学の方法論をお話するに当たり、最初に言葉の問題に触れます。科学とサイエンスという言葉がありますが、どうも1対1に対応していません。英語のサイエンスからアートを引いた部分が一般に日本語で科学と呼ばれていて、ここが第1種基礎研究に相当し、サイエンスとアートのオーバーラップする部分が工学や第2種基礎研究になるだろうと理解しています。日本語の芸術はアートからサイエンスを抜いた部分かと思えます。もう1つは、視点をどこに置くかということで、研究者がシステムの外から観察するのが自然科学の方法論です。これに対して、研究者が中に入っている内部観察の視点があり、実は構成的なシステムを作る、もしくは構成的にシステムを作るというのは内部観察にならざるをえません。



言葉の問題は言い換えれば文法とか構文の問題であり、視点の位置に関係しますし、思考をも規定していると考えられます。例えば、りんごを離れた位置から“もの”として見る場合は客観的な見方になりますし、りんごが落ちる“こと”というときはその動きを経験する立場になります。別の例を挙げると、川端康成の「雪国」は「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」で始まります。この英訳の1例は“The train came out of the long tunnel into the snow country.”で、原文における話者あるいは読者の視点は列車の中にあり、英訳では外から列車を見ています。システム内視点と客観的視点です。

では構成的方法論とはどんな分野を扱うのか。例えば、複雑系、それから実験不可能な宇宙論や進化論。これらは多層システムであり、従来の分析的科学では幾つかの層をまとめて理解する方法論にはなっていません。そこでどうするのかというと、「ある現象が現れるのを期待する」とか「出てくるのを期待する」方法で、これこそ構成的方法論、あるいはイノベーションの唯一の方法論ではないか考えています。すなわち、トライアル&エラーで、生成と選択を繰り返す方法論です。構成では部品集めから始め、モデルか試作品をとにかく作り、途中で分析を行い、改良を加え

ていく、このように言うこともできます。構成と分析は単純な逆方向ではなく、入り組んだ、強いて言えば90度違う方向を向いているのだと思います。

実はほとんど全ての生成物には環境との相互作用が絡んでいて、構成を難しくしています。進化も環境との相互作用で変化していくものです。製品でいえば、ユーザーの使い方や反応に相当する部分です。したがって、作ってから分析し、評価し、フィードバックさせていく、そういうループを何回も回すのが構成的な方法であると言えます。

広瀬 研吉 科学技術振興機構理事【パネルディスカッションコメント】

研究者側と企業側の間に横たわる悪夢の時代を乗り越えていくために、もし研究者側と企業側の結びつきに困難があるとすれば、そこにはJSTのような科学技術の振興を担う機関の果たすべき役割があります。



JSTは、悪夢の時代をつなぐいろいろな仕組みを用意していますが、今回のシンセシオロジー誌の論文にある、社会還元に向けた関門をどうクリアしていくのかについての記述を踏まえていけば、悪夢の時代を乗り越えるための仕組みをさらによく考えていけるのではないかと思います。つまり、研究者の持っている研究成果というのは、特許前のもの、特許手続中のもの、特許成立後のものというようにいろいろな段階がありますが、それぞれの段階に応じた仕組みを考えていこうというものです。企業の側にもいろいろな幅がありますから、企業の状況や幅を見ながら仕組みを考えて、よりきめ細かくやっていくことが重要と思っています。JSTの取り組みは、大きな意味では研究者側と企業側の間をできるだけ狭めていく、つなげていくということですが、もっとそれが重なるようにできないのかと考えています。例えば、一方で物質探索をしながら、もう一方で生産工程の研究をほとんど同時に検証しながらやっていくことができないか、こういう並行的な研究にチャレンジしたいと考えています。

シンセシオロジーに期待することの第1点は、第1種基礎研究の成果を製品化し、社会に還元していくには、いろいろな要素を組み合わせる必要があるため、シンセシオロジーの内容はまさにそれを世の中にきちんと示すことなのではないかということです。第2点は、成果を社会に還元するに当たって通るべき関門、それが大量生産なのか、標準化、規格なのか、また、コスト低減、エネルギー消費の低減のかなどを丁寧に示すことです。

そうすれば悪夢の時代に橋をかける役割を担おうとする者にとって大いに役立ちます。第3点目は、研究者、特に大学の先生方は、つい理論や計算のほうに、雑誌もサイエンスやネイチャーに向きがちであると感じています。そこで、研究者の側から社会に還元するための努力について、シンセシオロジーでステータスが与えられれば非常に意味のあることです。科学技術を振興する立場として科学技術の研究開発と知財戦略をどう結びつけていくのが課題になっていますので、そういうところにもシンセシオロジーが取り組んでいただければと思います。

木村 英紀 横断型基幹科学技術研究団体連合会長、独立行政法人理化学研究所理研BSIトヨタ連携センター長【パネルディスカッションコメント】

制御工学における制御理論では、1960年前後に、現代制御理論という非常に抽象的な概念が生まれました。これは制御系の設計に制御対象の数学モデルを使う非常に数学オリエンテッドな方法です。アメリカでも軍と宇宙を除けば、産業界ではほとんど使われませんでした。



それが日本でも使われるようになった決定的な理由の1つは、ロボ制御が発達したからです。ロボ制御はモデルが不確かでもいいから使える理論で、これを一生懸命やったからです。実際の工場で動いているプラント、あるいは製品になっている制御系というのは、ごちゃごちゃした、泥くさいものですが、それでもちゃんと理論を使って設計できることが示されたのです。現在では、制御理論が非常にたくさん使われ、例えば、ロボットの歩行というのは制御理論そのものになっている感があります。

さて、シンセシオロジーに期待したいのは、理論が出てきて、それが使えるためには何を克服したらいいのかということです。学問論の視点から述べますと、まず議論になるのが認識科学と設計科学です。認識科学というのは伝統的なサイエンス、特に自然科学を中心とした世界を知るためのサイエンス。一方、設計科学は対象を構成するためのサイエンスでシンセシオロジーと相通ずるものがあります。認識科学の方々が世の中では圧倒的に強く、ペーコン以来の確立された方法論を持っています。彼らは仮説を立てる、その仮説を実験によって検証するというループを回し、間違っていれば次の仮説を立てます。一方の設計科学には対応するものがあるのか。ペーコン流の仮説、検証のループを回すのに対応する設計科学の方法論、これが実は

ないところが、設計科学あるいは構成学の弱みになっています。設計科学にもそれに対応するものがあると言っている方もいます。事実命題に対して価値命題というのを作る。価値命題を、物を作ることによって試して、価値命題が満たされるか満たされないかでループを回すというような考え方です。

横幹連合も「横幹」という雑誌を去年から出しました。また、横幹連合はコンファレンスを隔年、総合シンポジウムも隔年でやっています。そこでは、本当にいろいろな学会の人たちが出てきて、議論が発展しています。シンセオロジーのコンファレンスもやられたらいいかでしょう。そのときには横幹連合も呼んでいただければありがたいです。もう1つ、実は私ども「コトづくり宣言」というのを横幹連合で発しました。これはモノづくりもいいけれども、これからはコトづくりが必要ではないかというものです。「コトづくり」は悪夢の時代を乗り越えるための方策にもなりえるのではないのでしょうか？

上田 完次 東京大学教授【パネルディスカッションコメント】

シンセシスとアナリシスを整理してみますと、まず、物質の根源を解明するというのは全体としての存在が既にあるわけですから、まさに分解していった、それは何かということ、つまりアナリシス・バイ・アナリシス。アナリシスというのは、分析と同時に、理解したい、わかりたいという意味も含んでいて、シンセシスは、統合する、構成すると同時に、何か作るということを含んでいます。つまり、方法論としてのアナリシスとシンセシス、それから対象としてのアナリシス、シンセシスという見方があるわけで、4つの象限が描けます。シンセシス・バイ・アナリシスという場合は、分析的な学問というものがあるって、それを合成して新しいものを作るという立場。現状の工学的なものはそれにのっとっています。それが正しいかどうかは、世の中に出して、市場でセレクションされ、役に立つかどうかで検証されます。アナリシス・バイ・シンセシスでは、失敗や間違いを含めて何かをやってみる。それで科学的な発見をするような研究者も出てきます。合理的な、演繹的な手法では、この試みというのは、演繹的に理屈があって、これだからこれをやるということでのやるわけです。シンセシス・バイ・シンセシスというのは、理屈はわからないけれども、どれだけの合理性を持って試行錯誤できるか、そのあたりが1つの重要なシン



セシスというものの方法論の「そうでないものではない」ということを主張できる根拠がありそうな気がします。

人間というのは何か新しいものを作るということと、不思議に存在するものを不思議だから理解したいという両方があります。シンセオロジー誌で全てをターゲットにするというのであれば、存在しているものの不思議を解明するときに、個別学で到達する深さ以上に、バイ・シンセシスでそれができるのかというところができたらすごいです。それから、新しいものを作るということも、理屈は何であれ、世の中にはいろいろ有用なものができてきているわけですから、それに対してシンセシス・バイ・シンセシスでもって、社会にとってより有益なもの、経済的価値も含めた価値を生み出すことができるのか、それらがこのジャーナルの中から出てくる、あるいは、そういう論文を扱ったということができればすごいなと、少し期待を込めて気になっています。

前田 拓巳 株式会社島津製作所技術推進部部长【パネルディスカッションコメント】

企業においては、本当の意味での基礎研究はなかなかやる余裕はありませんが、5年先10年先をにらんだ研究、それを使った先端的な、非常に挑戦的な製品を開発しようとした場合、産学の連携で国のプロジェクトなども利用しながら研究して、その成果を新しい製品、画期的な製品に結びつけようという動きが大きくなってきました。ただ、こういうものが終わった段階ですぐに新製品が出るわけではありません。やはり新しい製品であればあるほど、いきなり市場に出すのではなく、例えばユーザーのところに行ってベータサイト評価やいろいろな実証データを得ていく、その中でデータを積み上げ、性能を確認していくことが必要になります。先を見た研究であればあるほど、それを製品に結びつけるまでの間に時間的なギャップが存在します。企業にとって将来非常に大きな製品になるであろうという研究、このあたりに「悪夢の時代」があるだろうと思います。



「島津評論」は1940年に発刊されました。古い歴史はありますが、企業の技術誌ですから、やはりほとんどが新製品の技術紹介という内容になっています。できるだけお客様に有効性をアピールして使っていただくというのが基本的なスタンスです。他企業のいろいろな技術誌と比べると技術寄りの色彩の強い雑誌で、年2回発行しています。例えば、医療とか環境分析とかの特集を組み、特集論文と

一般論文という形で出しています。毎号10編から10数編の論文を掲載し、約3000部をいろいろな機関や社内に配付しています。技術誌はいろいろなビジネストークに使ったり、共同研究するときの取っかかりの資料とすることで、別刷りも用意して活用しています。

シンセシオロジーには、研究開発の成果を社会に活かすための方法論を記すという目的があるようですが、シナリオをきっちり作って研究するという姿勢は、当社の中の研究部門の特に若手の教育にも非常に意味があるのではないかという気がします。企業の研究部門は、研究のための研究といいますが、本当に研究が企業にとってどういう役に立ち、最後にどういう形になるのかを明確にイメージして、そのために最短距離でいくにはどういうシナリオで研究していくのか、何を押さえていかなければいけないのかを、ともすれば余りよく考えないで研究をしているというのがまま見られます。やはり研究をするときには、研究者が自分なりに十分考えた上でシナリオを作ってやってみる、だめだったらまた考え直すという、常にそうやって考えて研究をする、開発をするということが必要になってきます。そういう考え方を教え込むのに、シンセシオロジーは非常に役立つのかなと思ってきました。

持丸 正明 産総研デジタルヒューマン研究センター副研究センター長【パネルディスカッションコメント】

産総研の研究の1つの特徴は、要素技術を研究するだけではなく、それらを組み合わせ構成してみるということです。私の例では構成したものを実社会に出す、そして実社会で動かした結果を観測、分析してやることです。私は足の形の研究をずっとやっていて、ある企業と一緒に足の形を測る機械を開発しました。世界中で1万足ぐらいのデータをアーカイブし続けていますが、なかなか終わりません。実際に社会に出してみると、わからない問題がようやく見えてきて、それに対して技術開発や必要なときは政策提言をしたりして動かなくてはいけない、つまり「手離れ」悪く研究をする、面倒見続けるということになります。



シンセシオロジーでの査読についてはオープンになる査読は初めてで、まず緊張しましたし、かなり多くの時間を費やしました。著者と率直に話し合い、こんな点をもう少し強調すると面白いのではないかとということも含めて、査読のやりとりはなかなか面白いと感じました。一方、執筆を依頼されたときは、また所報を作るのかと思いましたが、

説明を聞いてみるとコンセプトが面白く、大変新しいことをえらく古い方法、つまり論文誌という方法でやるのだなと思いました。実際書いてみて難しかったのは、研究プロセスを一般化するために書くということ。研究上でどうやって手段を選び、構成していったかという方法論は書いたことがありませんでした。査読者とのやりとりも踏まえながら改めて考えてみると、どうもあまり合理的ではなかったかなとも思いました。それから、一般化は、残念ながら自分でもできたような気はしません。また、学術性を担保しつつ、異分野の読者にもどうしたら面白いと感じていただけるか、読者の理解をどう得るかは、やはり執筆者として苦労しました。技術的に難しかった点の1つは、企業との守秘情報をどう取り扱うかということで、共同研究先企業と率直に話をし、判断しながら論文を構成しました。

シンセシオロジーそのものが悪夢の時代を迎えないようにするのが大事です。アーカイブすれば構成学は自然と構成されるのかということ、そうではありませんし、一般論を抽出し切れないところもあります。そういうところをワークショップとしてやってみると面白いのではないのでしょうか。シンセシオロジーのレベルとかステータスを守るために、厳しい査読をしなければならないケースも出てくるでしょう。そういうことも含めて、まだまだ乗り越えなければならない山が幾つかあると感じています。

赤松 幹之 シンセシオロジー編集委員会編集幹事【パネルディスカッションコメント】

新ジャーナルに名前をつける時、研究成果を社会に活かすには統合や構成がキーワードになると考え、「構成」に対応するギリシャ語のシンセシスに、「学」を表すロジーを付け「シンセシオロジー」にしました。シンセシオロジーは新しいタイプの学術誌と言えます。シーズとして転がっている研究成果を実際に使えるようにするためのプロセスやどう育てたらいいか、すなわち方法論を論文という形で収録するので、知の共有を行うのがジャーナルという媒体だとすれば、物事を構成していく方法論を記録に残し、土台となるものをつくりたいというのがシンセシオロジーの基本的な考え方です。シンセシオロジーでは全分野を対象に、どういうふうに構成して社会の役に立てるようにしていくか、そういうことの共通的な方法論を見出すというのがポイントです。また論文の査読プロセスと査読者の氏名を公開しています。公開することによって査読者側は言わば読者の代表の立場



になり、研究成果の使われ方が読者から見て十分納得できるものかどうかという観点で論文を読むのです。読者から見て一体何が大事なのかを考えながら査読者は意見を著者に返し、著者との意見交換を通じて分野外の人でも読めるストーリーのしっかりした論文がまとまります。

さて、従来の研究者というのは、正しく分析し、正しい方法論で確実に結論を出していく、いわば厳密に科学的な方法論を適用して真理を見出す能力がある人だと思のですが、それに対して、社会に科学的な知見を役立てるといふ観点からシンセシオロジーの論文を書ける人は、科学的な発見を社会にどのように持って行くと社会に役に立つかを意識して研究のできる人間となります。社会に役に立つためには何をしなければいけないかを強く意識する、指向性がはっきりしている人ですし、かつ、全体を見渡して、この成果に加えるためあと何をしなければいけないか、そういう研究を進めるパースペクティブな能力を持つ研究者がシンセシオロジーに論文を書けるといいます。

このように考えますと、シンセシオロジーを、研究能力の1つとしての研究に対するパースペクティブ能力をアピールする場にも使っていただきたいと思います。それは大学の先生でも、企業の方でもいいです。企業では、自分の研究所の人間がこういう論文を書けるということは、その人が成果をいかにして次の研究につなげていけるかを考えられる、そういう能力を持っている研究者だと上司の方がわかっていただけるとか、そういう使い方も非常に大事なことではないか。これまで持っていた研究者に対する評価軸とは違う軸で研究者を評価するというところにシンセシオロジー使っていただけないだろうかと思います。

吉川 弘之 産総研理事長【総括・閉会挨拶】

研究の、あるいは研究者としての“悪夢”とは何なのかを考えると、方法論がなかなか見えてこないという状況に遭遇していることです。こういう状況は工学系の人たちは皆経験していることですが、現代という時代そのものが方法論の見えない状況にあるような気がしています。なぜかという、今、環境の時代が来たと言うものの、環境問題は、昔から指摘され、警告されてきているのです。ただし、発見があり、事実が解明され、警告があっても、どう行動すべきかはまだわかっていません。問題を解決する方法が分からないという状況が社会全体として起こってしまっているということです。普通、温暖化がわかればそれを停止する方法がある



というのが調和的な構造ですが、そうならないところに科学の1つの不十分性、科学の考え方の限界があります。人間と自然との関係はどうなのかを扱う自然観という言葉があるように、人工物とはいったい何なのかを総体として考える人工物観がなければなりません。人間が人工物を作ってきたことによって今の状況があるのですから。

私たちがぶつかる思考過程とか研究過程の“悪夢”が社会現象にまでなってくると、それをやはり一人ひとりの行動に立ち返って考えてみる必要があります。どうすればいいのか、今日のディスカッションで面白かったのは「手離れの悪い研究」という表現です。研究成果を世の中に出してみると、それが1つの新しい研究テーマになって、後はもう知りませんとは言えなくなります。そこにはやはり循環という経路があり、研究が研究論文として出て行くだけではなく、その結果がどうなったかという世の中から再び返ってくることを見届けるという基本的な態度が必要です。したがって、大きな社会的な仕組みの中では、ある人工物が社会で使われ、その結果がどうなったかを観察し、ある種の価値判断を下して次に何を提案していくか決めなければなりません。

さて、このような様々な背景のあることを基にして「シンセシオロジー」を見てみますと、人間の行為、研究者の行為が社会の利益や価値とどう結びついているか、そういう第2種基礎研究の過程を可視化するための雑誌だと位置づけられます。その書き方はまだ確定していませんが、執筆者と査読者の議論を通じて両者が対話するという“進化”の構造を持っています。これは明らかに1つの情報の循環であり、ループを実現する1つの手段だと言えます。「シンセシオロジー」は1つの雑誌にすぎませんが、科学のあり方、あるいは研究と社会との関係ということについて一石を投じる意味があることを、ぜひご理解いただきたいと思います。

